

◆【随想】BISKRA号航海記(13) ③ 元機関長 新木繁雄

5月5日(土) ヒホン港修理停泊

日本では「こどもの日」で休日だが、アルジェリアの船では関係ない。8時に機関室で「ドックの作業員が呼んでいる」という連絡あり。主機メインベアリング下側メタルを抜き出して点検するためジャッキで持ち上げるのだが「用具のありがたが分からない」という。私だって用具のありがたまで知っているわけではない。皆で一緒に探して、ストアの隅に見つけた。

説明書では、20/100ミリジャッキアップで抜くようになっているが、28/100ミリ持ち上げて、ようやく下メタルが抜けた。まあこれくらいなら何ともないだろう。その後クランクメタル、スラスト・パッドなども取り出してみたが、どちらもすごくきれいで海水混入の影響は全くなかった。

海水の漏れは、昨日の木片打ち込みで止まっている。今日は亀裂の先端にストップホールを開け、ストッパーを打ち込んだ。ストッパーを打ち終わったところで、タンクへ潜って写真を撮った。この上に12ミリの鉄板で作った箱をかぶせて溶接する。

午後7時、代理店の車で市内を1時間ほど案内してもらった。日本でいうライオンズクラブのような、町の有力者が資金を出し合って作ったというスポーツクラブには、いろんな装置や道具がそろっていた。屋外に1000メートルあるというカッターの練習コースや馬場などもあった。

その隣にはスペインの町を象徴する闘牛場もある。代理店の人は闘牛を見るのが好きで「年に2、3回、有名なマタドールが来ると見に行く」といっていた。しかし彼の奥さんは、あんな野蛮なものは絶対に見たくないといっているそうだ。ほとんどの肉屋の店に、豚足の生ハムがぶら下がっている。1本買って帰った。

5月6日(日) ヒホン港修理停泊

9時、船底亀裂箇所の修理が終了、タンク内から写真を撮った。溶接のゴミがたくさん残っている。工事監督に「潤滑油を張り込まねばならないから、すぐ掃除しろ」といったら「今日は日曜日で人夫がいらないから、明日やる」といって帰った。

11時過ぎ、しばらく中断していた日曜日のミーティングをやろうと、船長が呼びに来た。スペインで最高というワインがテーブルに出ている。今後の対策について話し合う。機関のフラッシングについて、潤滑油を循環し、3回は取り換えが必要だと機関長に進言した。船長は「船底接触は自分の責任ではない。パイロットが下船する時、このまま真っ直ぐ行けといったから、その通りにしたら接触したのだ」と大きな身振りを交えて説明していた。

午後岸壁を町へ向かって歩いていたら、エージェントが車で通りかかり、町まで送ってくれた。電報、電話局からアルジェ駐在の小枝さんに、修理工事完了のテレックスを送った。

夜、暗い水面にイカ針を投げ込んでみた。しばらくしたら、グーッと重くなり、ゴミのようなものが引っかった。すごく重い。照明が届かないので何だかよく分からない。水面まで引き上げて体を乗り出してのぞいた途端、真っ黒なスミをまともに顔に吹きかけられた。3キロもある甲イカだった。港の中でこんな大きなイカが釣れるとは夢にも思わなかった。その後もう1匹釣れた。早速刺し身にして武村君と一杯。1匹は醤油で炊いて、機関長に持っていった。

「海員だより」